へ 13
3727
2

棋田舎好文作
一勇齋國芳画

与話情浮名横櫛

四編上

四編下

栄久堂

梅田舎好文作

一勇齋國芳画

五編下

与話情浮名横櫛

五編上

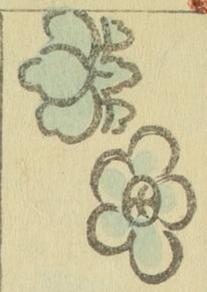
榮久堂

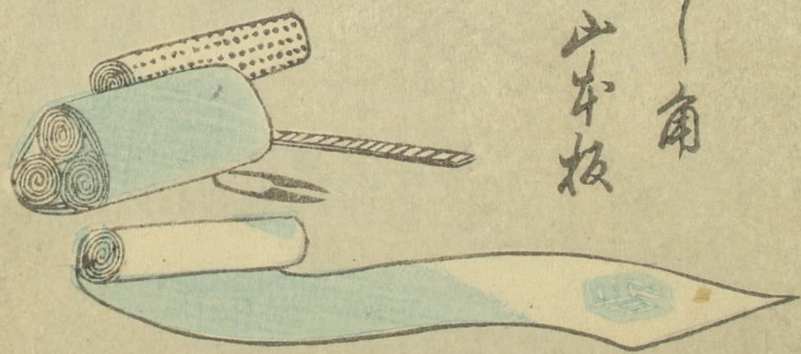
与話情浮名
よこぐし
六編
榮久堂板
上
棋田舍好文作
一勇齋國芳画
下

門へ13
號 3727
巻 2

横ぶし六編下

梅田舎好文作
一勇斎國芳画





かやだ
ぞし角
山本板

日月燈江海油風雷鼓板天地一大戯場と云漢土帝が聯句に
して世々に演戯盛なりその中にも西廂記と十種曲はそぐれて
誉をとりとなん扨亦皇國の舞臺には天照大神の天巖窟にかくれ
させなひしより鈿女命が舞曲これ所作吏の始祖なり夫より今の世に
つさへ優民の其家ならぞへ挙にいとなあらぬ茲にあられ演戯の道を
綴を業としいるめしたも本舞臺三尺の卓にむかひどうやらこうやらら
幕は明ても腹中に不知短戈の窓戸下これは世界はまろくら間夜の
礫あたりしぶいに書つぎますが僥倖と是横櫛の小説も近きに稀
なる高評の數に入この的をそろさぬ急嗣編なるべしと日々
夜々に梓元の催促ぞうざくと浪の音繁幕にひとしく
早拵のふ手ぎりも一勇齋の妙手の筆を呼ものに引返して
明まば口繪の趣向は浄るりしやアく引

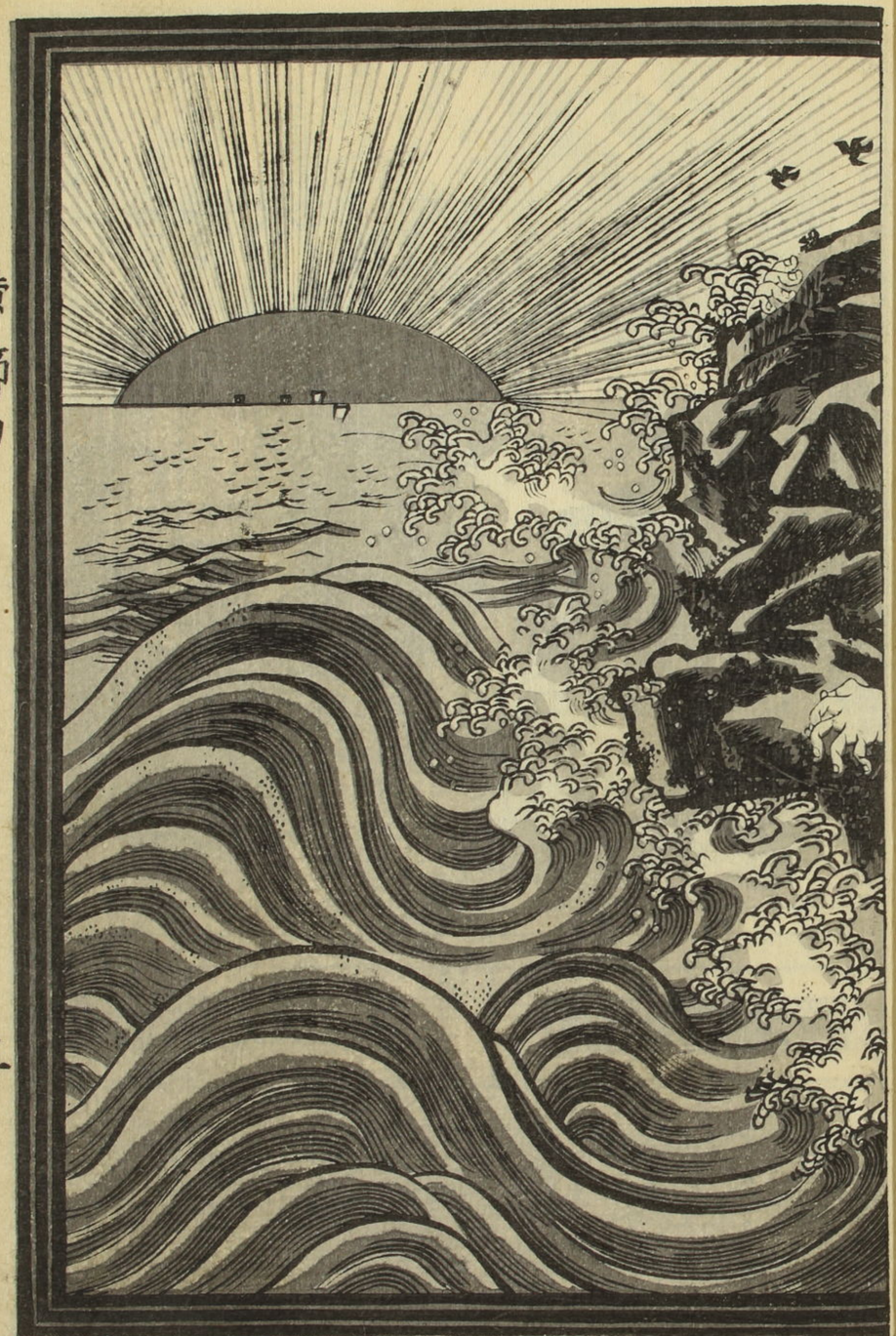
嘉永七甲寅歳次孟春發市

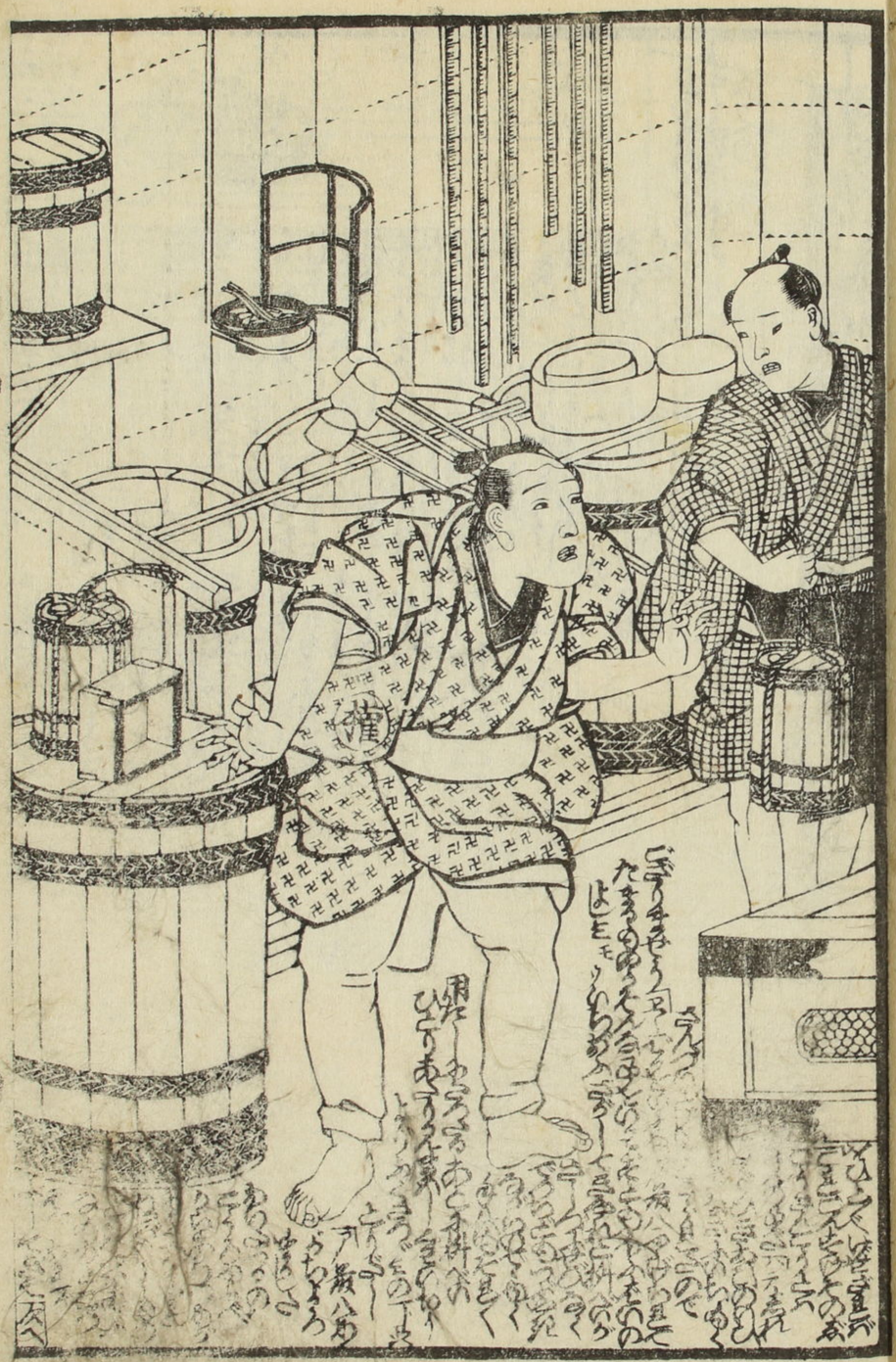
棋田舎好文記

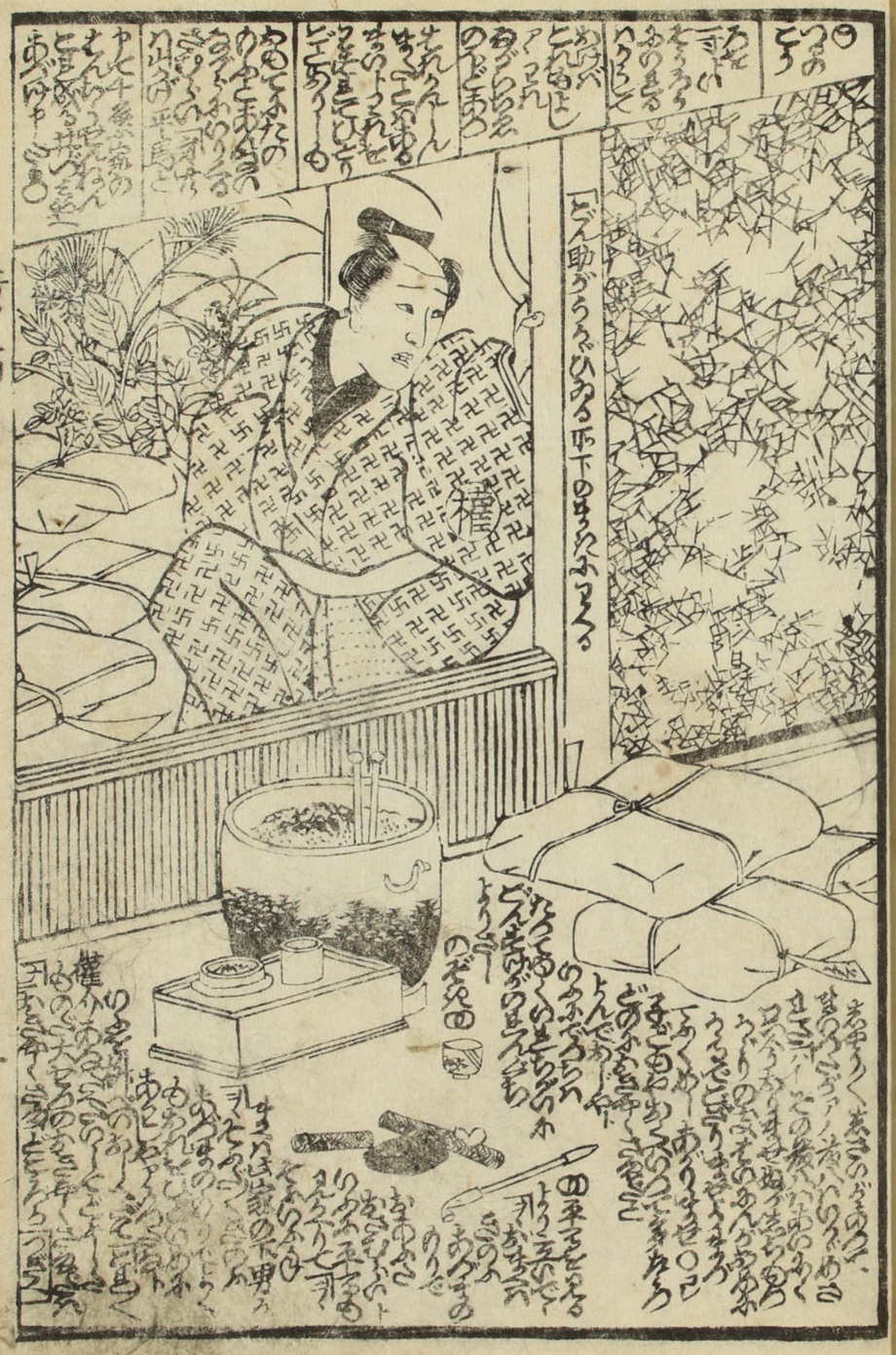
鳴乙女
菊

御曹子
爲朝
其八一
鳴乙女
小ふち
女護島姫
梅薫女

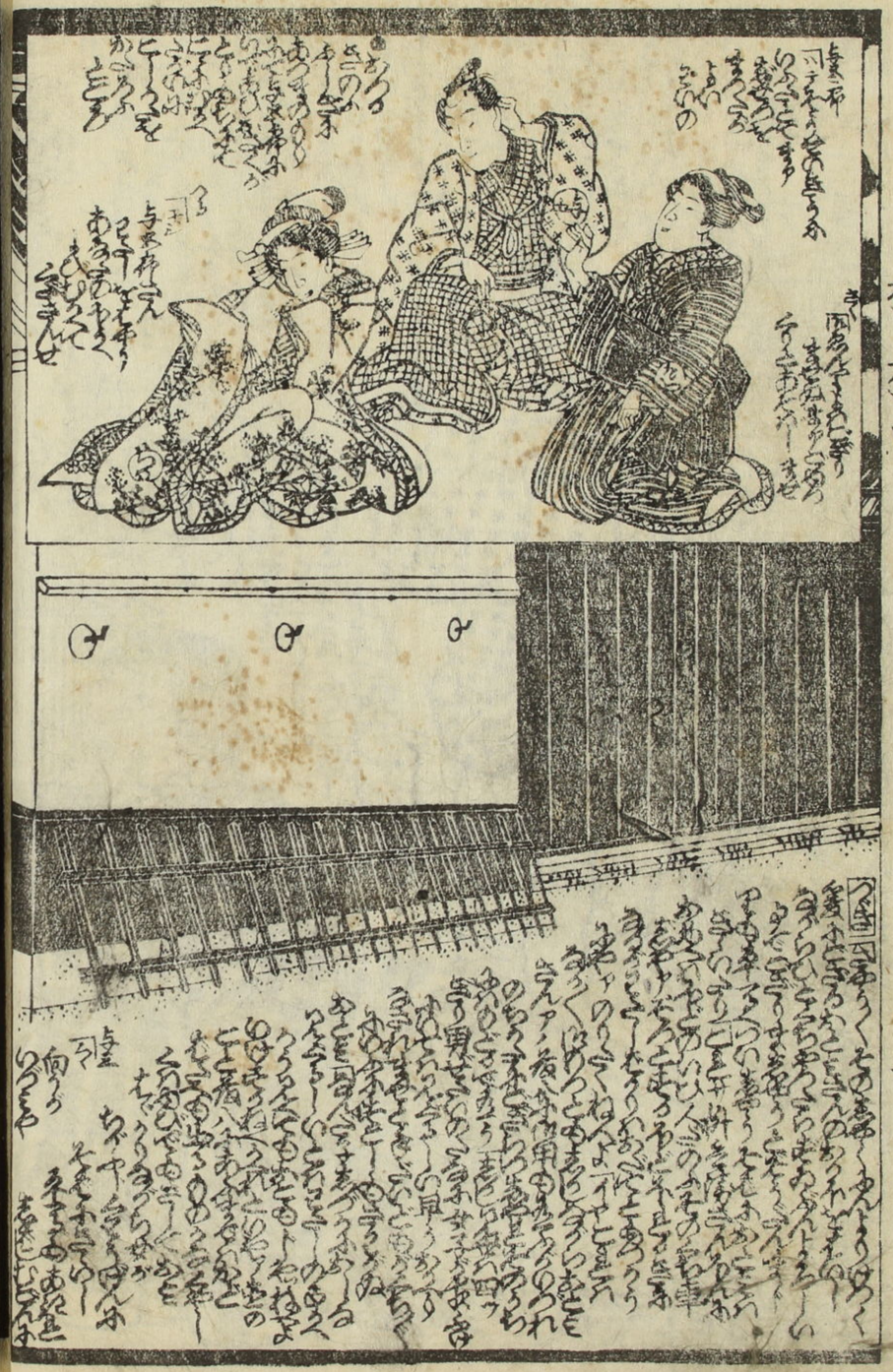
与三郎小船に乗出
逆浪に漂ひ茲身命
急りを不思議に
海中の巖に打上られ
再生の想をなして
旭を拜し東の
故郷を望
其六二







用水桶



好文作 國芳画

好文作
國芳画

夫遠昔釋尊ハ雪山を出て法を説大聖孔子ハ魯國より
通て五常を諭す神ハもとより此國の三種寶にあぞらへて
勸懲の道いさゝかも違ひぬ神璽善惡の鏡に移す眞心を
濁せば八雲闇雲に若氣の坂北一里塚色と欲との徑に迷ひ
正直正路をよそにあり戀の重荷もまゝあらぬ浮世の旅
ハ道連の友によるさへ与話情いなハ便らんかたもなれ与三が
島の仇夢も離別の蝶番縁も躰もきれたて再び結ぶ三度
笠草鞋の四乳とくく稿成と五編の催促筆の立場もなかへに
意馬の短かれ端綱なのれが無智をうつるのまゝ

嘉永八乙卯
青陽日發行

東二

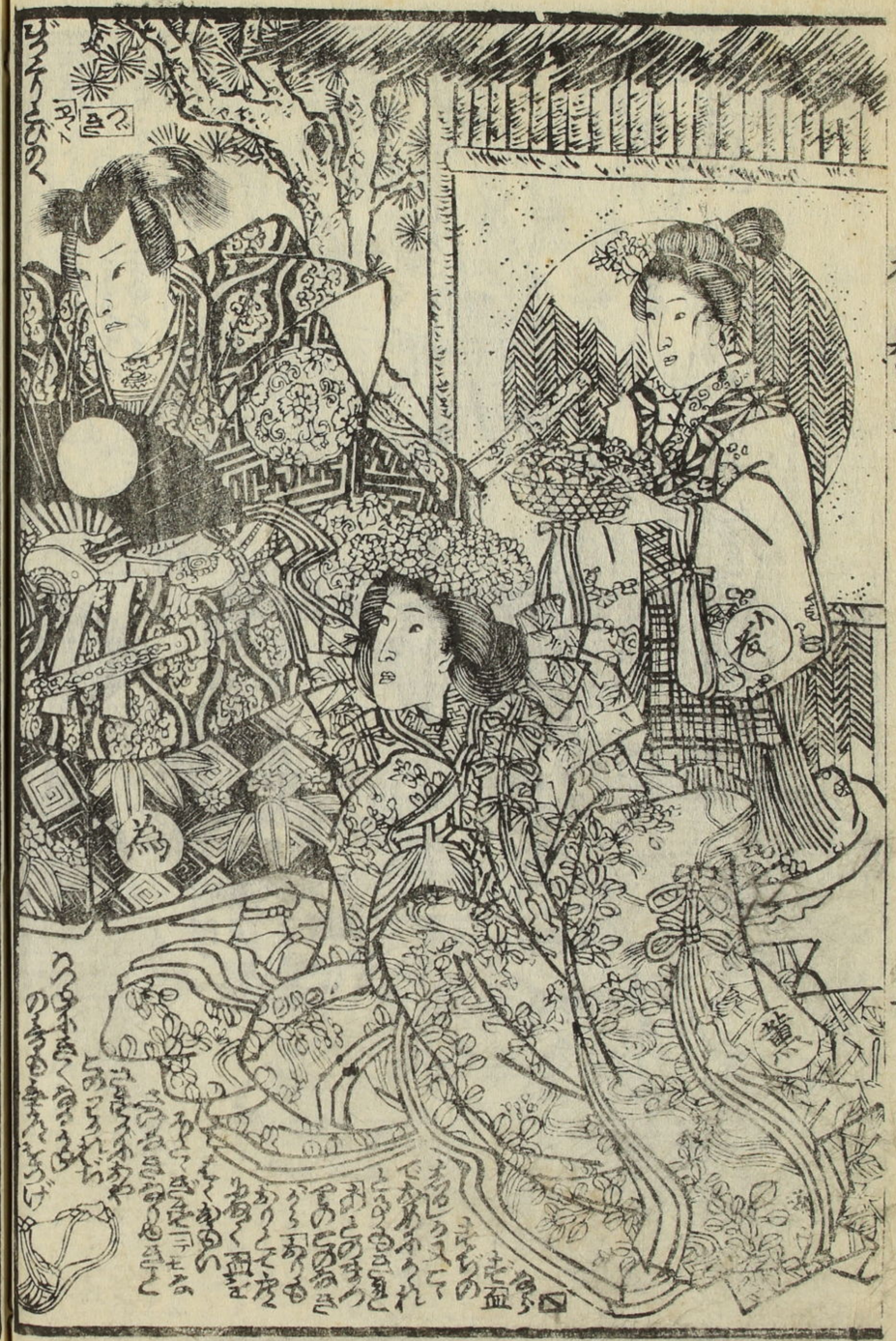
楳田舍好文述

観音久治
穂積
左近の妻
關路

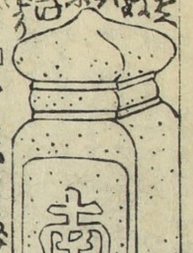
伊豆屋
与五郎
同言号
おつる

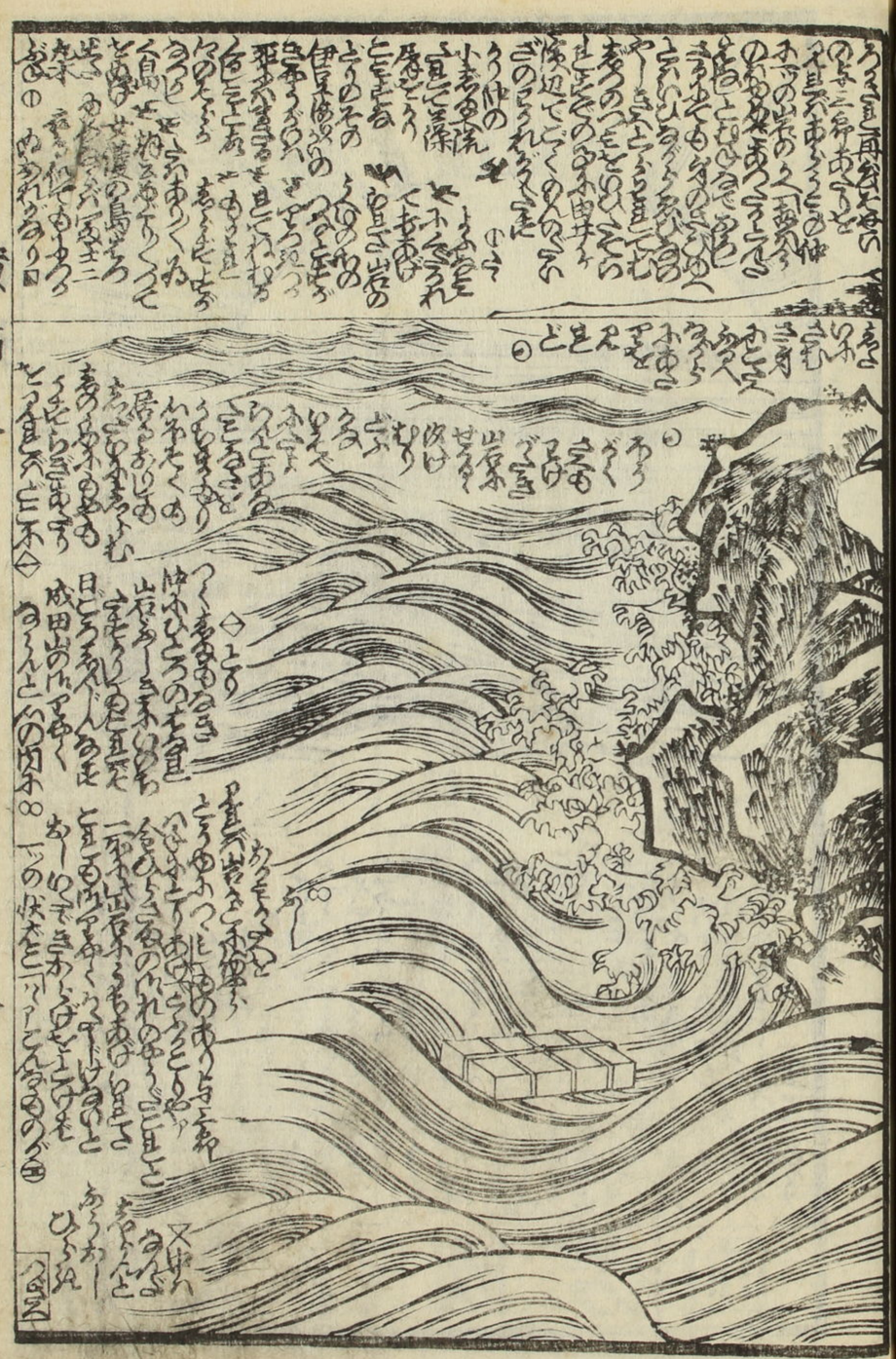
向疵の与三

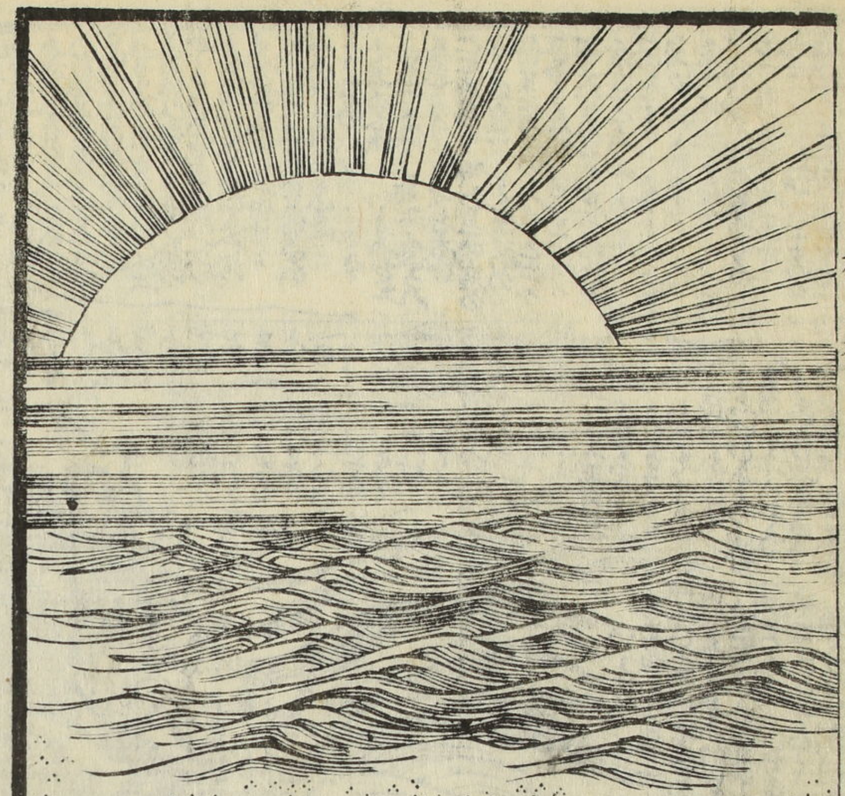
伊豆屋下男忠助



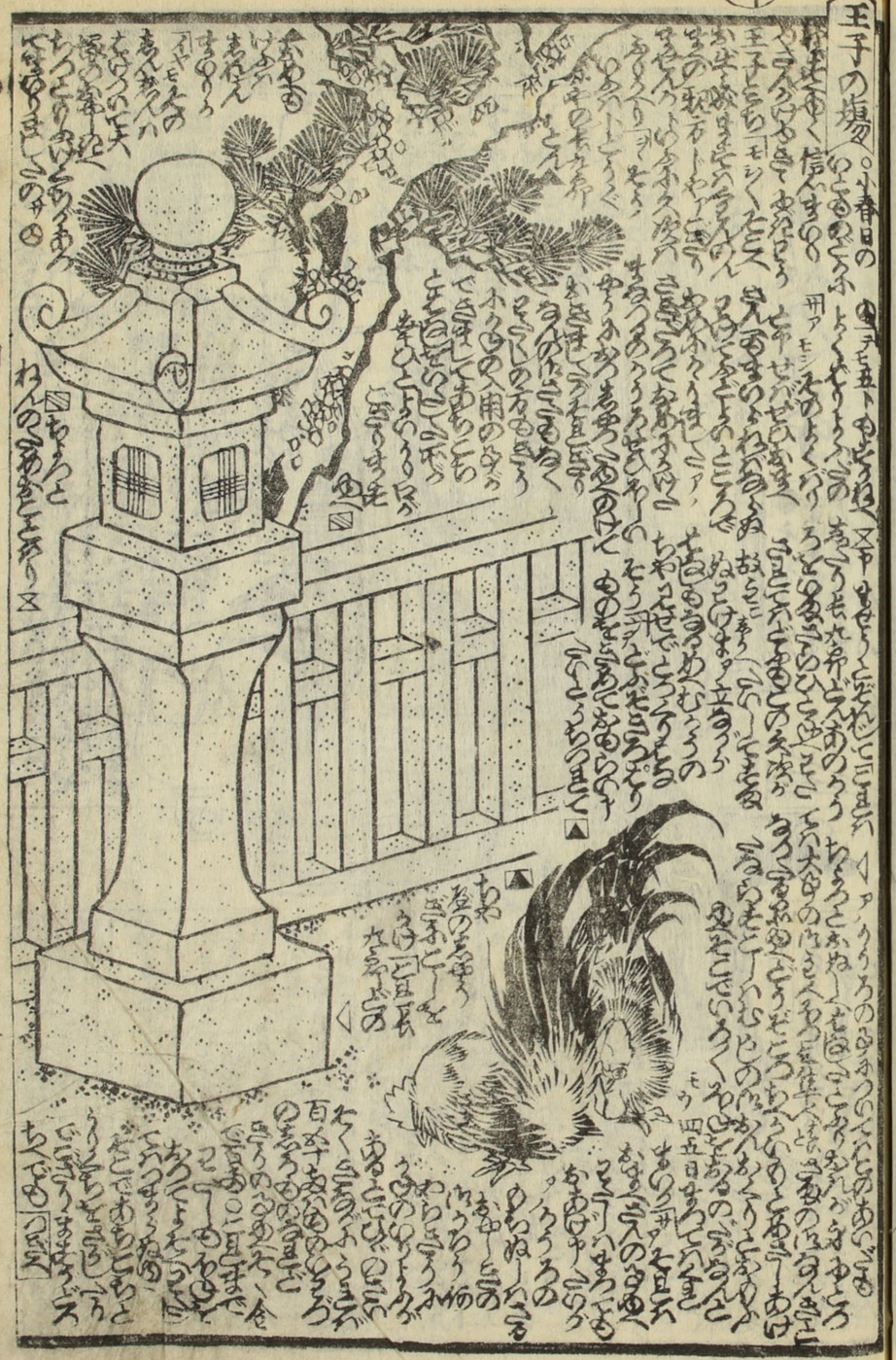
南迎北洋女人國





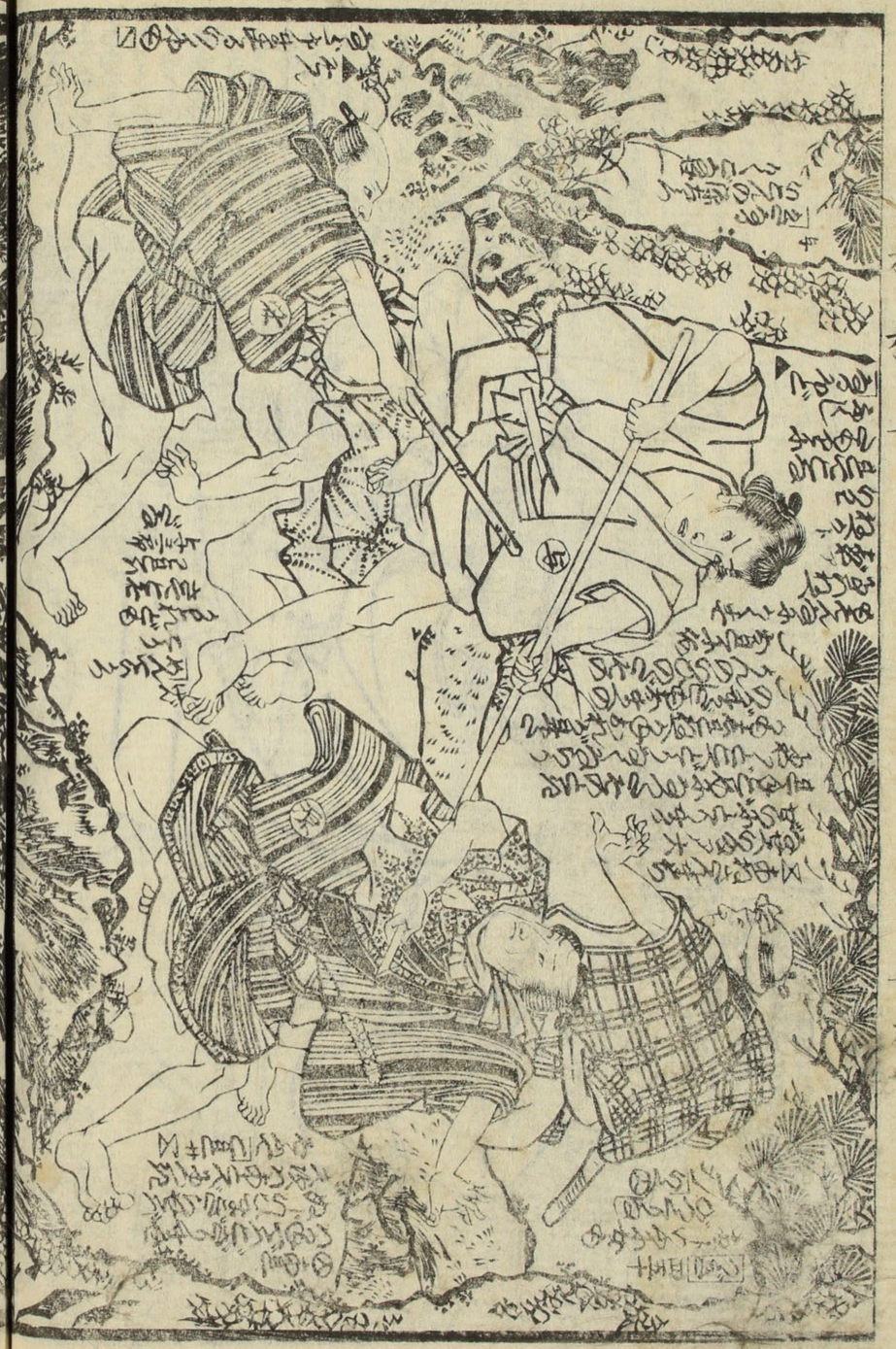


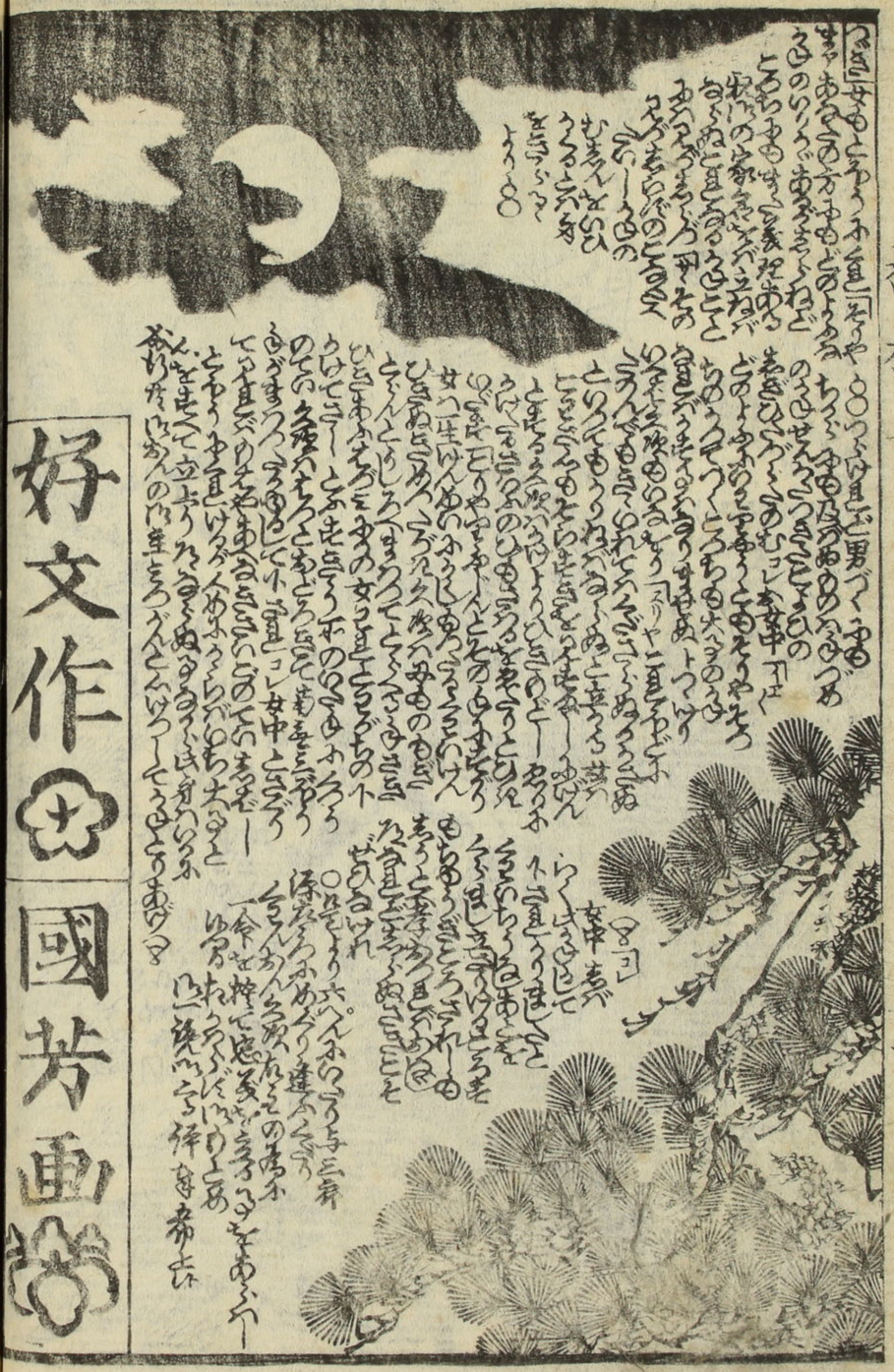
好文作 画芳國



玉子の場

（日暮里の場）





好文作 國芳画

此草紙の作者雀郎主人ハ彼一廓の園中ニ芳き薫を含ミ今をさるべと作名の好文木ハ菅家の愛樹梅田舎ハ千束の塘ハ其中ニ軒端の茅も隠家の茂睡が真土の碑もくれて闇ハあやなれ其中ニ梅ニよく似て真白な序の半葉を埋艸せよとはきつけられいなむ間もなく板元の丁稚をまたせて画組をうるにきられ与三が島紛失から古郷を忘れて貫ふ親の情と忠助が笠まなりて人目の番人火の用心と吹廻し合羽にうくれ袖が浦観音久治が栖とさらに男の義理を立花の宇壽雲なるで不可思議の縁もつれぬ手ゞくの伐まて疵も愈るなどその良策の功にひとしく数にやいれて御覧のほど最一二帙にうんすてなくト序文の序の字を板下の序に少しよごれにあるん

乙卯新鐫

筆耕舎玄魚戯述

赤間鎌倉
趣むかんくに
南駅の旅
泊ふ酒妻
をりよみ
の圖
黒砂
次郎藏
赤間
源左ヱ門

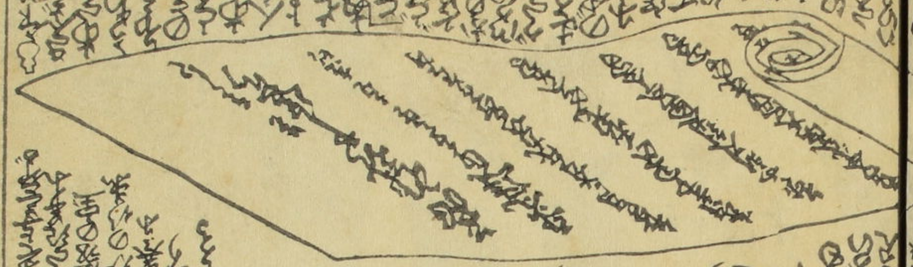
加納山の
和四郎
相生

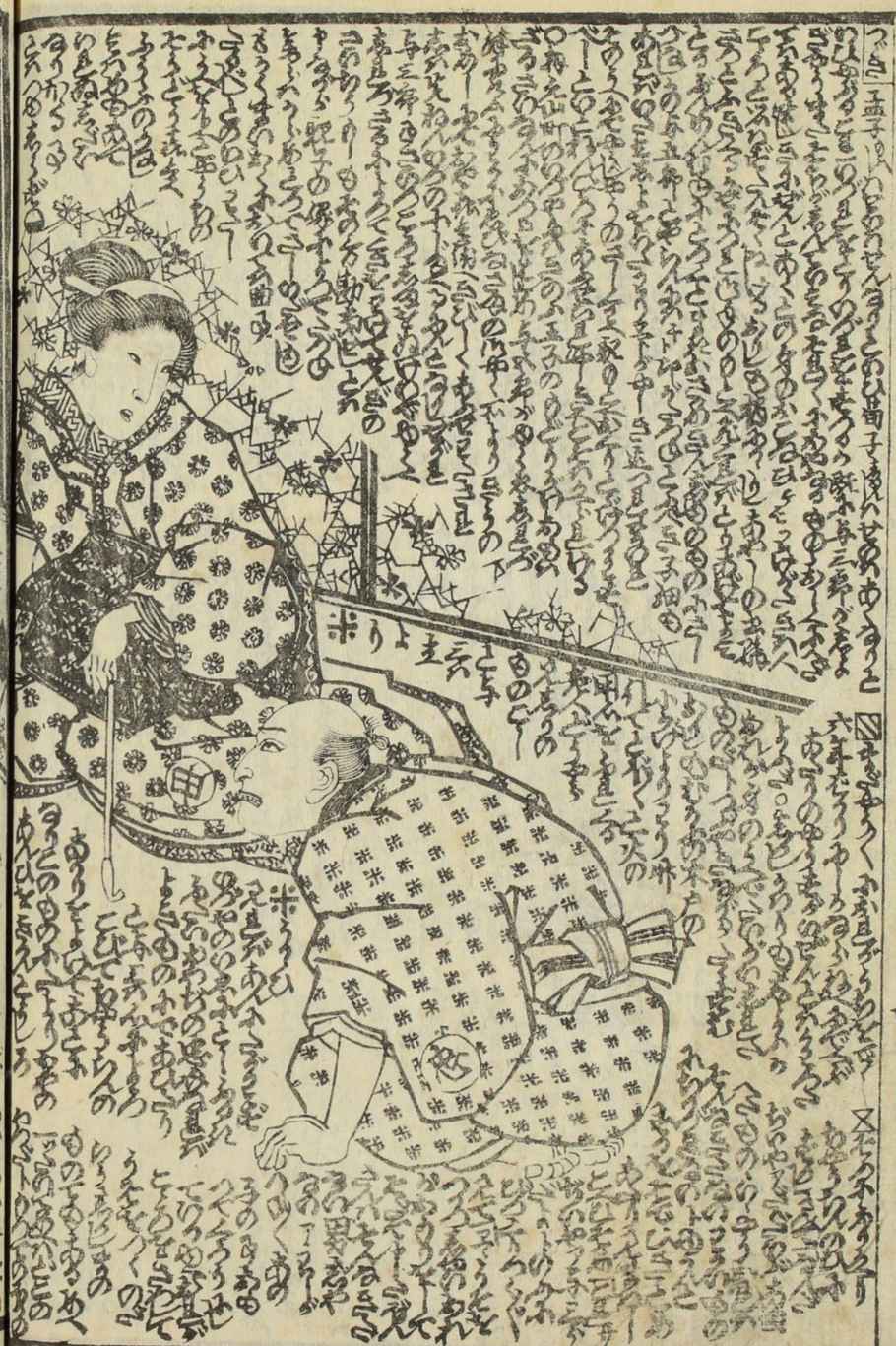
けんのんな
和半社
庵ぶめや
ぬくしたる
梅四宗

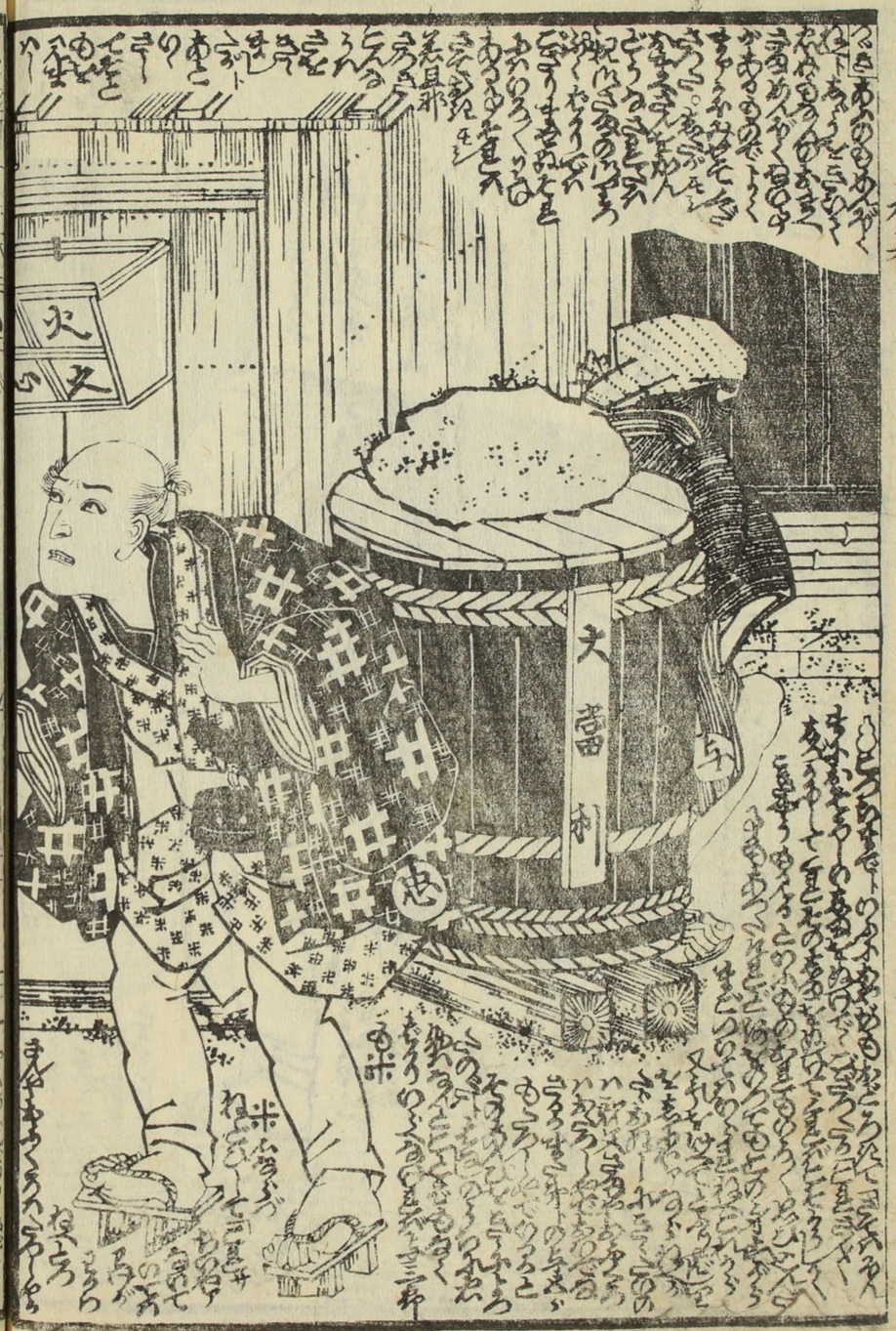
久次女房
お
ゆみ
観音
久次

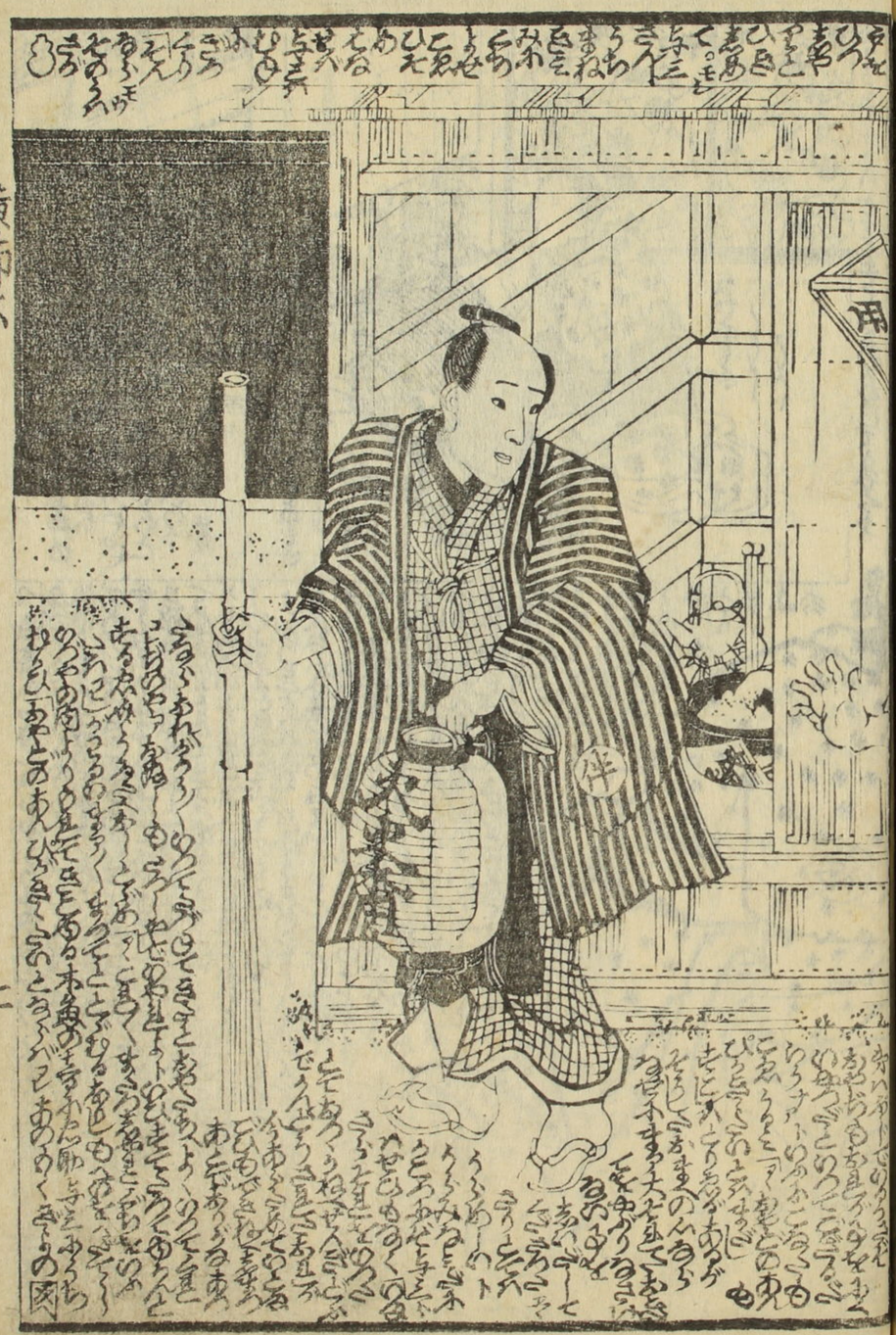
小道具屋
長九郎

向疵の
与三

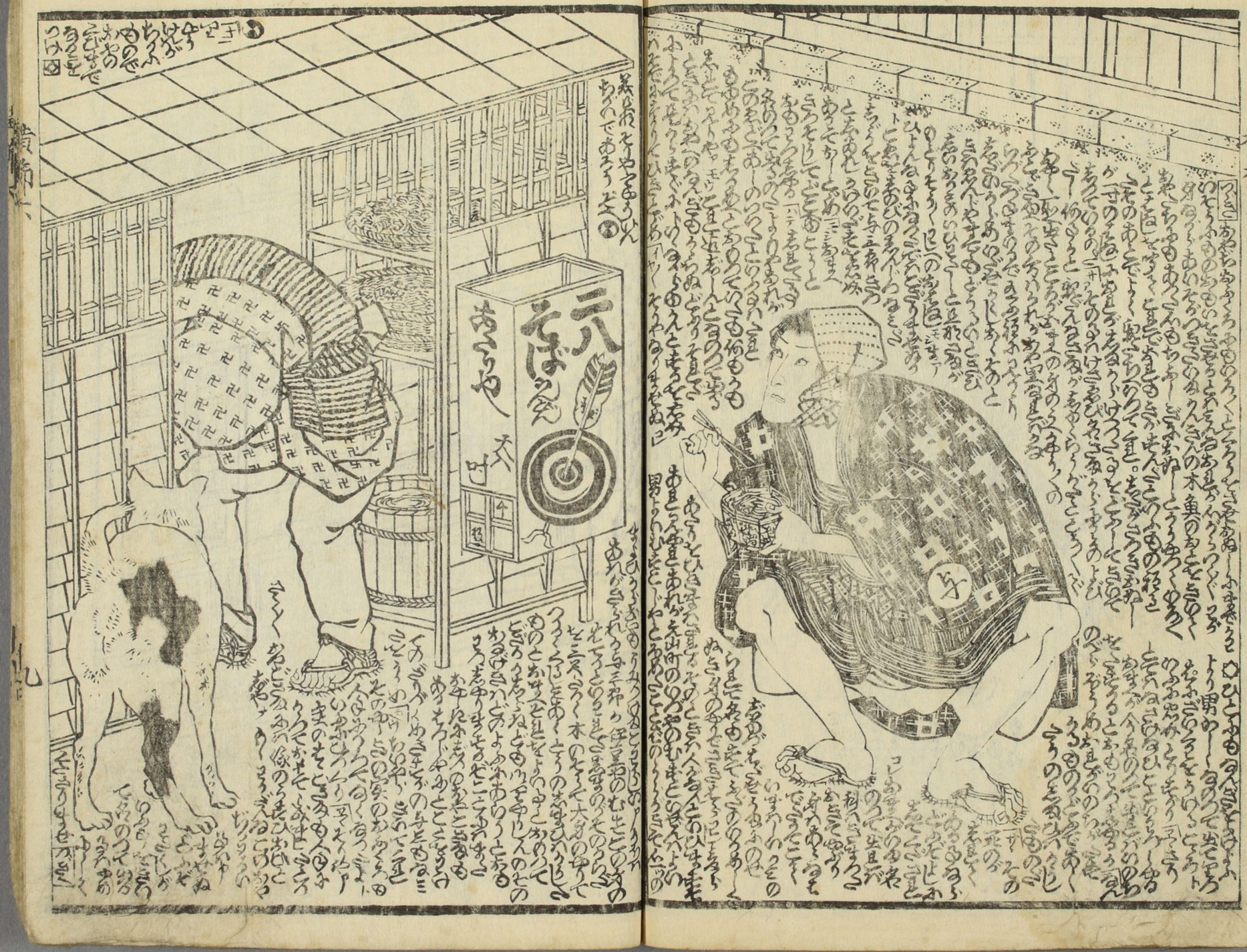




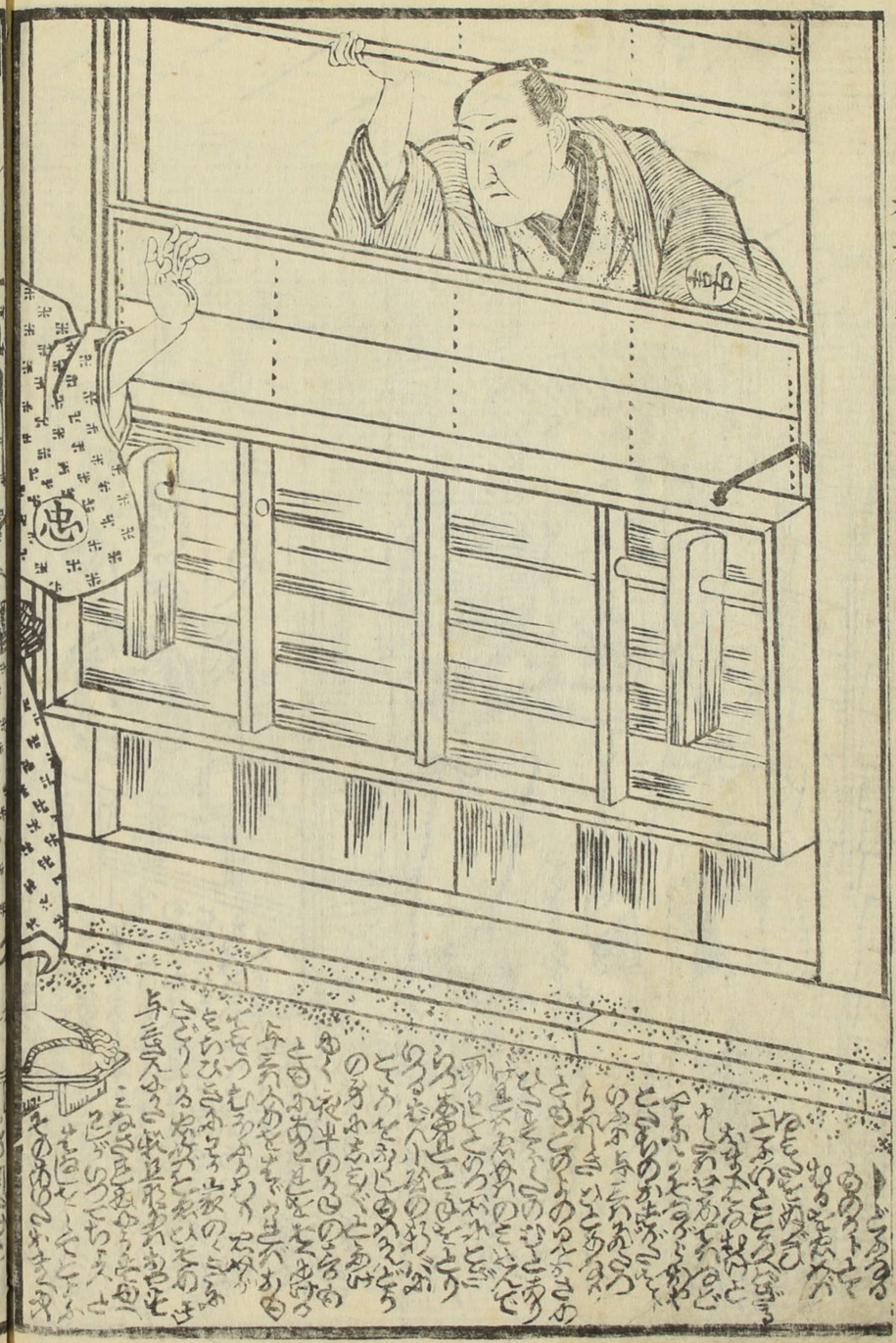




番小屋の内の体

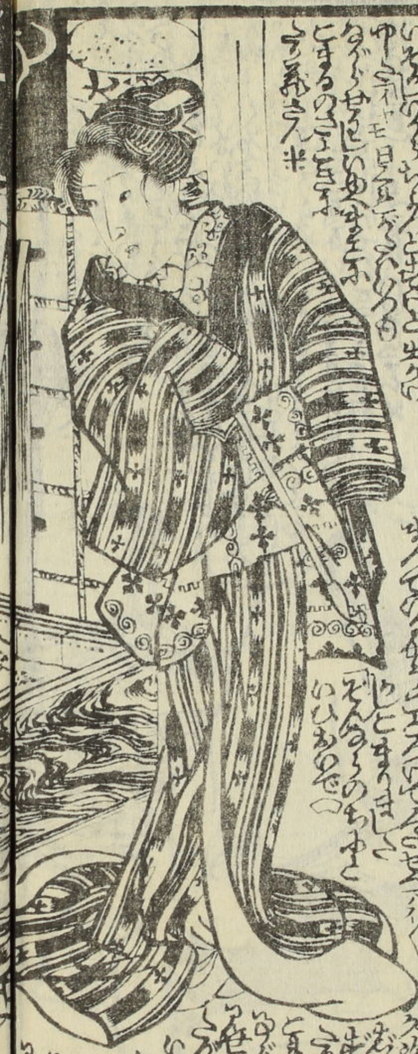


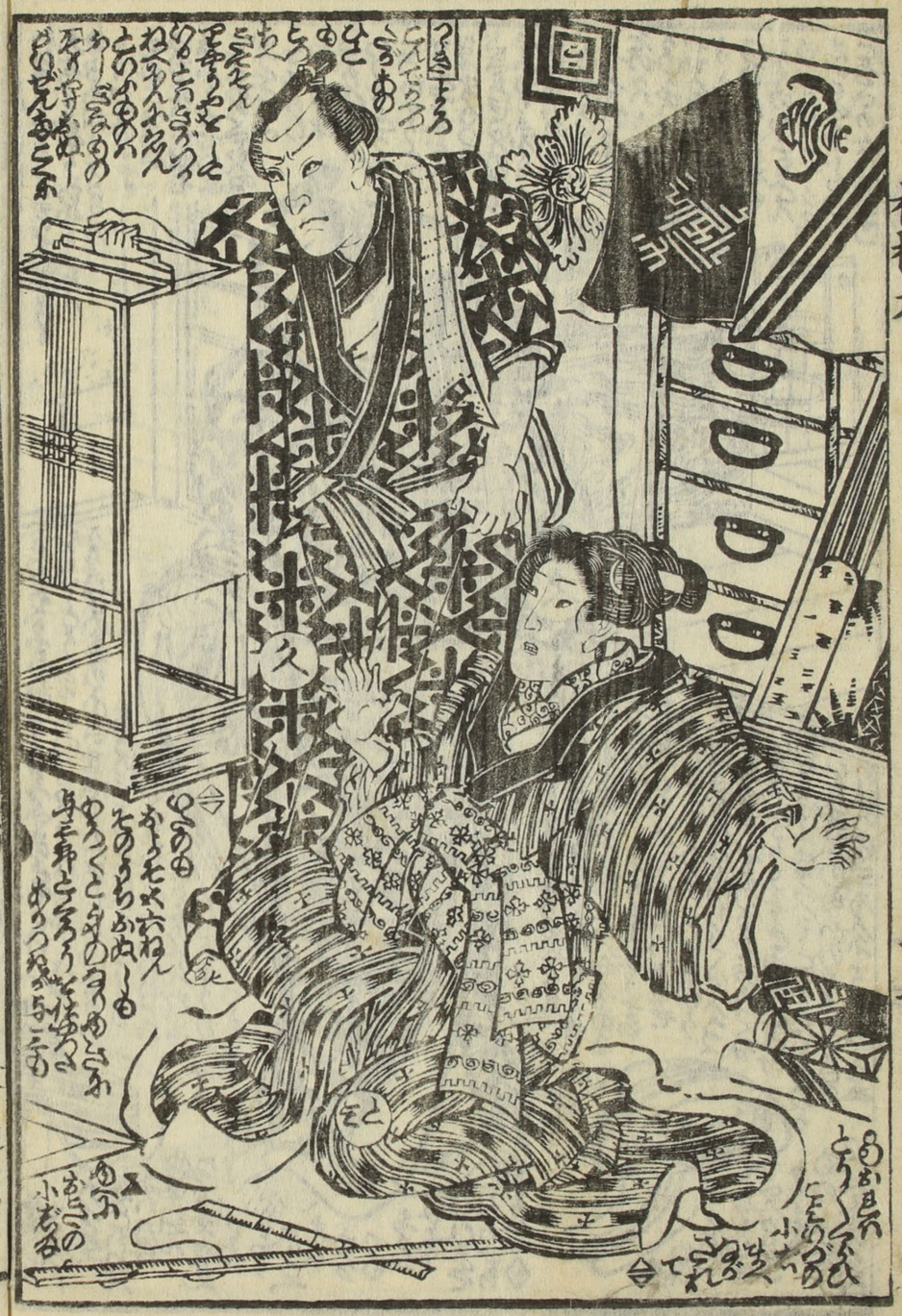
二八
そばうん
あたりや
大吋


忠

与

國芳画 好文作





好文作國芳画

嘉永八年乙卯春新版目録

三都妖婦傳 中本三編出板 仙果作 豊國畫

春のみとし草紙 京山作 九編十編 國貞画

堀川唄真實録 仙果作 五編六編 國芳画

當写殿下茶屋駅 魯文作 三冊よみ切 國貞画

玉櫛笥箱根仇討 笠亭作 三冊よみ切 貞秀画

邯鄲諸國物語 十九編 廿編出板 笠亭仙果作 歌川國貞畫

地本草紙問屋 榮久堂 江戸芳街親仁橋角 山本平吉發兌